

# 瓶が教えてくれた夫婦のカタチ

## 結咲りと

夫と、わたし達夫婦の話だ。

夫が休みのある休日のこと。この日はIKEAに出かけたのだが、夫がそれを見つけると決まってその場から動かなくなる。家族で出かけていても、わたしと息子がその場から離れてしまったことにも目もくれず、ずっとひとりで鼻息荒く興奮して見ている。そんなものがある。そう、「それ」とはタイトルにもある通り、瓶のことだ。

夫に出会うまで、瓶はただのガラスでしかなかったわたしも、この熱烈なまでの瓶愛に感化されて、人並程度には関心を持つようになった。透き通るような、きれいに湾曲する透明に見える向こう側の世界が揺れ動くのを眺めていると、なんだか心が風ぐような気がする。こんな気持ち、きつと夫に出会わなければ、瓶に対して思うことはなかったろうと思う。

そんなわたしは今、一輪挿しが好きで、ドライフラワーのアナベルを自室に飾っている。その瓶は名の知れたものでない、量産されているであろう百円ショップのもの。しかし、そんな瓶でも夫は、「なかなかセンスいいね！」と褒めてくれた。多くの瓶を眺め吟味してきた夫に言われたからこそ、そう褒められたのは嬉しかった。褒め方が大げさ過ぎて、ちょっと恥ずかしかったくらいだ。

夫は手当たり次第に瓶を見つけては、あらゆる角度からそれを眺め、吟味する。そして、購入し家に連れ帰るかどうかをじっくり考え始めるのだが、その時間が異様に長い。異様に長くて、傍で待っていることは、小さい息子にとってはもちらんだが辛抱強いわたしでもなかなか待ってられない。そうなってしまったてはもう仕方ないので、ちょっと離れた場所で事が済むのを待つのである。これがなかなかどうして、退屈なのだ。

でも、そんな夫のすごいところがある。

これだけ瓶が好きなら、あれもこれもとコレクションに加えたくなってしまいそうところを、夫は時間をかけて本当に欲しいかどうか、その場できちんと考えるのだ。たとえ

## 瓶が教えてくれた夫婦のカタチ

手にしやすい価格のものでそれは変わらない。額に手をあて、じっとそれを見つめて。また手に持って色んな角度から眺めてみる。時には人工照明や自然光にあててみたりして。そうやって、夫の中で納得のいった瓶だけが、我が家に来ることができる。たぶん、わたしなら悩み疲れてそのまま後先考えず買ってしまおうと思う。聞こえよく言えば、わたしは持ち帰ってからそれを生かせる場所を探すひとだ。

そんな夫が瓶に対して持っているいくつかのこだわりを、以前聞いたことがある。

それは透き通るようなブルーベースの形容しがたい色をしていること。光を通したときの色の変化がきれいであること。部屋のインテリアにマッチするかどうか。最後に、家に既にある瓶と被らないこと。以上の四つ。でも、きつとこれだけじゃないのだろうか、勝手にわたしは思っている。でなければ、買うか買わないかを決めるのにあんなに時間がかかるはずがない。

この日も例外に漏れず、時間をかけて慎重に吟味した結果、この瓶はお迎えすることになった。玄関の下駄箱上を片付けて、そこに一輪挿しで飾りたいのだという。玄関先には誓約書として作ったウェディングツリーを額に入れたものと、デイズニールゾートで作ったもらった横顔シルエットを額に入れたものを飾っている。そこに添えるように置きたいのだそうだ。うん、これにはわたしも賛成である。きつとシンプルでかわいい。

その後日、たまたま夫と二人で出かけた先でユーカリのドライフラワーをお手ごろな価格で見つけた。二人そろって「玄関に飾ろう！」と意見があったので、ユーカリのドライフラワーを購入して、早速夫が購入した瓶に飾った。

それはやっぱりかわいかった。白の背景、枠組みの木。くすんだ緑とブルーベースの瓶。それぞれが主張し過ぎず、干渉し過ぎずによく映える。これはいい買い物だった。そう言えば、夫も大きく頷いていた。

ふと思うことがある。

夫婦は、しょせん他人同士でしかないけれど。一緒にいる時間を重ねるたびに、他人だからこそ良かったのだと、そう思う。

わたしとは違う別個体。育った環境から、好みなどの趣向も、得意不得意も全部わたしとは違う。そこからくる「良い」とか「悪い」は、あくまで自分の中の価値観のものさし

ではかり、判断したことに過ぎない。けれどそれをしなくて済むように、お互いがお互いの「良い」も「悪い」もまとめて許し合えたら。認め合えたら、きっとそれは二つそろって大きなエネルギーになる。

それって、すごいことだ。

すごいことだけど、すごく難しい。そう思う。

お互いにならないものを補い合って、ゆっくりゆっくり大きく、まあるくなって一つになっていく。…わたしは、夫とこの「感覚」を体験したかったのかも知れない。夫が好きな瓶の話を書いていて、ふと、なんとなくそう感じたので書いておく。

わたしは、夫と他人同士で良かった。

他人同士だけれど、夫婦になれて良かった。

こうして、自分にはないものや知らないもの、広く大きな世界を教えてくれるひとが一緒にいてくれる、意識しないと忘れてしまうようなことを、大切にしたいと思う。

このエッセイを書いている途中、お茶を入れに席を立ったときに見えた玄関の一輪挿しは、西日を受けて七色に光を放っていた。なんて尊いのだろう。

それはたった今ここに書いた、大切にしたいことと同じように見えた。